

梅花短大 ○川端澄子 家本修

目的：2種類の服（スーツとカジュアル）の3種類の提示方法（実物、写真、スタイル画）で、イメージの結果が相違するのかを検討する。相違するとすれば、いかなる要因が影響を与えているのかを本報では明らかにする。

方法：4人のモデルが2種類の服を着装し、各々のイメージ測定を行った。被験者は女子短大生（18～20才：58名）で昭和61年6月に普通教室で実施した。評価は集団により質問紙法（SD法：23対語）で行った。

結果：23個の形容詞対を変数とし因子分析（バリマックス回転）を行い、つぎの結果が得られた。「実物」は3因子（累積寄与率85.6%）、「写真」は4因子（88.2%）、「スタイル画」は2因子（72.0%）が大きく出現する。各因子を検討すると各々の第I因子は「評価の因子」と考えられ7つの変数（たとえば高級な、知性的な、上品ななど）が共通している。そして他の因子は「実物」の第III因子と「写真」の第II因子「活動の因子」（たとえば地味な、おちついたなど）に関連がある。2つの服種を提示方法別に分析すると「実物」は各々の「評価の因子」（第I因子）、「活動の因子」（スーツの第II、カジュアルの第III因子）が共通していると考えられる。「写真」は「評価の因子」（第I因子）が共通している。「スタイル画」のカジュアルな服装では、「評価の因子」（第I因子）は他と異なる「たのしい」「個性的な」の変数が含まれた。これらの結果より、各々の因子分析で抽出された各因子は互いに無相関であるため、イメージの分析において提示方法によりイメージの因子は異なると考えられた。